

—千里ライフサイエンス新適塾—
「脳はおもしろい」第17回会合

アルツハイマー病の謎を解く：
認知症研究 2025 年問題

講 師： 西道 隆臣 (さいどう たかおみ)

理化学研究所 脳科学総合研究センター
神経蛋白制御研究チーム
シニア・チームリーダー
早稲田大学 客員教授 (兼任)
慶應義塾大学 客員教授 (兼任)

日 時： 2017年 7月5日(水) 17:30~20:00

場 所： 千里ライフサイエンスセンタービル

講演会 6階 千里ルーム A (17:30~19:00)

懇親会 6階 千里ルーム B (19:00~20:00)

講演・懇親会ともに参加費無料

コーディネーター

山本 亘彦 大阪大学大学院生命機能研究科・教授

古川 貴久 大阪大学蛋白質研究所・教授

主 催： 公益財団法人千里ライフサイエンス振興財団

〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1丁目4番2号

千里ライフサイエンスセンタービル20階

E-mail:tkd@senri-life.or.jp Tel:06-6873-2001

財団ウェブサイト <http://www.senri-life.or.jp>

講演要旨：

認知症の最も大きな危険因子は加齢です。大体 70 歳代後半から罹患率が上昇します。これは、「2025 年頃までに認知症を予防しなければならない」ということを意味します。

何故「2025 年頃まで」になのでしょうか？団塊の世代（約 200 万人/年だそうです）が 2025 年頃に 70 歳代後半に達するからです。現状のまま予防法が確立されなければ、認知症患者数が急増すると予想されます。そうすると、社会保障制度は破綻に向かい、併せて、増税は避けられないでしょう。また、介護のために退職せざるをえない人たちが増え、労働人口が減少すると予想されます。

神経細胞は分裂後細胞であるため、一度変成したら、基本的に再生しません。また、「認知能力」は神経回路とその結合に存在します。これも、一度破壊されたら元には戻りません。認知症は典型的な神経変性疾患です。2025 年までには約 8 年が残されていますが、臨床試験に最低 5 年を要すると考えると、3 年で回答を見つけなければなりません。時間との闘いです。

本講演では、アルツハイマー病の発症機構を解説し、予防・治療へ向けた新しい戦略を展開します。

講師紹介：

学歴・職歴

- 1982 筑波大学第二学群生物学類卒業
- 1984 東京大学大学院薬学系研究科修士課程修了
- 1984 東京大学大学院薬学系研究科博士課程進学
- 1985 米国Cornell University, School of Applied Physics, Visiting Scholar
(1986年5月まで)
- 1986 米国Cornell University, School of Applied Physics,
Research Associate(1986年9月まで)
- 1988 東京大学大学院薬学系研究科博士課程修了 (薬学博士)
- 1988 (財)東京都臨床医学総合研究所・遺伝情報研究部門 主事
- 1997 理化学研究所 脳科学総合研究センター・神経蛋白制御研究チーム
チームリーダー
- 2009 理化学研究所 脳科学総合研究センター・神経蛋白制御研究チーム
シニア・チームリーダー
- 2015 早稲田大学客員教授兼任
- 2017 慶應義塾大学客員教授兼任

受賞歴

- 1985年9月 国際ロータリー財団大学院留学フェローシップ
- 1995年9月 日本生化学会奨励賞
- 2004年10月 Outstanding contributor award, Alzheimer Research Forum
- 2007年9月 時実賞 (日本神経科学会)
- 2015年12月 安藤百福賞第20回記念特別奨励賞

所属学会

- ・日本生化学会
- ・日本薬学会
- ・日本認知症学会 (理事)
- ・Society for Neuroscience, U.S.A.
- ・日本神経科学会
- ・日本病態プロテアーゼ学会